

聖公会の聖餐式について



司祭 ヨハネ 井田 泉

聖餐式は教会の中心的な礼拝。イエス・キリストの最後の晩餐を継承・再現するもの。第1部はみ言葉、第2部は聖餐。主教または司祭が聖別したパンとぶどう酒を、キリストのからだと血として分かち合う。司式者のみならず出席者全員が参加して、主イエスの出来事をドラマとして共通体験する礼拝。

聖公会の聖餐式は、改革を重ねながらも、基本において古い伝統的な礼拝の流れを保っている。一連の順序（儀式）をとおして、イエス・キリストの臨在の深みに入って行く。

聖餐式は、キリスト教がかつてローマ帝国の宗教となったこともあり、長くラテン語で行われていた。聖餐式の中の祈りに対して多くの音楽家が作曲しており、これを「ミサ曲」と言う。バッハの「ロ短調ミサ」、モーツァルトの「戴冠ミサ」「レクイエム」、ベートーヴェンの「荘厳ミサ」、シューベルトの「ドイツ・ミサ」などがその例。日本でも多数作曲されており、奈良基督教会・高田基督教会では主として松本正俊司祭が作曲したものをしている。なお「レクイエム」とは死者のためのミサ（逝去者記念聖餐式）のことである。

聖公会は英国（国）教会の流れを汲んでいる。英国（イングランド）の宗教改革において決定的なことは、自分たちの言葉（英語）で聖書の朗読を聞き、自分たちの言葉で祈りを献げる教会として出発した、ということである。それを具体的に形にしたものが祈祷書である。英語聖書翻訳者ウィリアム・ティンダル（司祭）と祈祷書編集者トマス・克蘭マー（カンタベリー大主教）は、いずれも殉教した。二人の殉教者によって聖公会の基が築かれた。

聖餐式の流れ

(準備の式)

第 I 部 み言葉の部

参入

キリエ (Kyrie 主よ、憐れみをお与えください)

大栄光の歌 (Gloria グロリア)

特祷

旧約聖書

詩編

使徒書

福音書

説教

ニケヤ信経

代祷

懺悔 (赦罪——とりなしの祈り)

第 II 部 聖餐の部

平和の挨拶

奉献

感謝聖別

聖なるかな (Sanctus サンクトゥス)

ほめたたえよ (Benedictus ベネディクトゥス)

聖霊を求め祈り (エピクレシス=祈求)

主イエスの聖餐制定の言葉 (アナムネーシス=想起)

主の祈り

神の小羊 (Agnus Dei アニユス・デイ)

陪餐

感謝

祝福・派遣

○赦罪・聖別・祝福が司祭固有の働き

1. 聖餐準備の式

聖餐式を深く経験するために心の備えをする祈り。これを前夜等に済ませたか、各人が行ったことを前提にして、省略することもできる。言葉の数よりも心、姿勢が大切。

礼拝を始める時点で、そこに祈りの空気が満ちていることが大切。

2. ろうそく点火・点鐘・聖歌

ろうそくの点火は目に示す礼拝の開始の合図、鐘の点鐘は耳に告げる礼拝の始まりの知らせ。心と身体全体でわたしたちの救い主を迎える。期待と喜びをもって十字架を仰ぐ。

ろうそくの光は、わたしたちの心を照らしてくださるキリストのいのちの光。光を心に感じるようにする。

鐘を打つときは余韻を大切に聞く。打ち終わった後、やわらかな響きが空間と自分の心に浸透していくような気持ちで礼拝開始に加わる。

最初の入堂聖歌は、会衆全員で一緒に捧げる祈り。歌詞を大切にし、音楽を感じつつ、神さまへの感謝と賛美を少しずつ深めていく。

このように、礼拝はプロセスを経て少しずつ深まっていく。最初から全過程に参加してこそ深い恵みを与えられる。

3. 参入

特別の世界（イエス・キリストの臨在の世界）に入っていく。復活の主イエスを呼び求める祈りで聖餐式を開始する。主イエスの臨在こそが中心。

4. キリエ

キリエ（主よ）・エレイソン（憐れんでください） ギリシア語

これは病気の息子を抱えた父親の主イエスへの求め（マタイ 17:14 - 15）、通りかかったイエスを呼び求めたエリコの盲人の叫び（マタイ 20 : 30、31）にもとづく。

憐れみはイエスの心とはらわたに沸き立つ愛。

5. 大栄光の歌

ベツレヘムの野原に**天使の合唱**が響きわたり、わたしたちはその合唱に参加する。ルカ 2 : 14

6. 特祷

その日、その主日の意向を示す祈り。特祷は英語では Collect。「集祷」とも訳される。教会の長い歴史の中でいろんな所で用いられてきた祈りを集め、整えたもの。一般的な表現の中に具体的な事柄を込めると、生きた祈りとなる。

司式者と会衆の唱和（呼びかけと応答）は聖公会の礼拝にとって重要なもの。互いに呼びかけ祈りあうことをとおして、一致と深まりが実現していく。福音書前後、感謝聖別の最初も同様。祈る前に短く沈黙し、気持を集中させることがふさわしい。

7. み言葉

三つの聖書箇所（旧約聖書、使徒書、福音書）を朗読し、耳を傾けることによって、歴史の中の神と人の出来事に触れ、神の救いの歴史の中に入っていく。

特に福音書は、主イエスの言葉を直接聞くという意味で、立って福音書の方を向いて聴く。

聖書朗読は主イエスご自身がナザレの会堂でなさったこと（ルカ 4：16-）。

旧約聖書の後に短い詩編を用いて祈り、黙想する。

黙想とは、み言葉を心と身体に浸透させること。この経験、修練を重ねることは信仰生活の深まりにとって大切。

聖書の朗読は、①朗読者自身が自分自身の心と身体でそれを受けとめる（朗読者自身が聴く）、②はっきりと言葉と内容を会衆に届ける、ということが大切。急がない。間をとる。声を前に出す。口はもちろん、顔をはじめ身体全体を用いる感じで明瞭に発音する。身体をやわらかく。

8. 説教

み言葉の説き（解き）明かし。講演や講義ではなく、聖書の

響きが鮮明になるためのもの。

語るのは説教者であるが、説教者は会衆によって祈られることを必要としている（エフェソ 6：19 - 20）。説教者と会衆は共にみ言葉を祈り求めてそれを受ける。

9. ニケヤ信経

使徒信経とともにキリスト教信仰内容の告白・宣言。ニケヤ公会議（325年）で起草され、コンスタンティノポリス公会議（381年）で今の形になった。信経は信条とも言う。

父なる神について、子なる神（イエス・キリスト）について、聖霊について、の三つの部分からなる。

信経（信仰告白）はみ言葉（神からの語りかけ）に対するわたしたちの応答。この信仰告白は、神に対して、世界に対して、自分に対して行う。

これは信仰の告白・宣言であるとともに神への賛美でもある。はっきり、しっかり、心と声を合わせて行うのがふさわしい。告白をとおして神の愛といのちがわたしたちの内に流れ込む。

10. 代祷

隣人、教会、社会、世界のために祈る。人のために祈ることは主イエスの働きに参加すること。わたしたちは大祭司キリストのもとにある小さな祭司として、人のために執り成し祈る。

わたしたち自身が祈られることを必要としているように、世界と教会と人は祈られることを必要としている。

代祷担当者は速やかに所定の位置に立って祈りの呼びかけをす

る。会衆全体の祈りを代表して引き受け、また先導する。

項目は、一つ一つを簡潔に神の前に差し出す感じで。あまり言葉を補わず「……のため」だけでもよい。大切なことは、祈るべき人や事柄を心をこめて執り成すこと。執り成しの祈りをすることは信仰生活の基本。

言葉として省略可能なものは（ ）に入れるように週報の記載方法を工夫したい。

1 1. 懺悔^{ざんげ}と赦罪（とりなし）

懺悔は心を痛めつつ自分の罪を告白すること。「わたしは、思いと、言葉と、行いによって……」。「、」のところでひとつひとつ確かめる。けっして急がない。告白を通して、私の罪はキリストが引き受けてくださり、愛のキリストが私の中に入ってきてくださる。赦しを受けることから新しい人生が始まる。

1 2. 平和の挨拶

復活の主イエスが「平和があなたがたと共にあるように」と呼びかけてくださる（ヨハネ 20:19 ほか）のを受けて、わたしたちも相手のために平和を祈り、呼びかけ合う。この祈りと呼びかけの中に、平和を実現してくださるイエスが臨在される。

1 3. 奉獻

イエス・キリストがご自身を神と人のために献げられたこと

(奉献) にわたしたちも加わる。パンとぶどう酒はわたしたちの生活、労苦、いのちのシンボル。これをとおしてわたしたちは自分(全体、あるいは大切な部分)を神にささげる。神はそれを喜んで受けてくださり、神はそれを何倍にも増し加え、祝福と共にわたしたちに返してくださる。パンとぶどう酒のほか、献金を献げることも同じ意味。

14. 感謝聖別 (主の祈りの前までを含む)

聖餐式の中心的部分。

15. 聖なるかな (Sanctus サンクトゥス)

預言者イザヤが経験した天使セラフィムの歌 (イザヤ 6:3)。神の臨在の前に、神を畏れつつも神を愛し賛美する合唱。わたしたちも神の前でこの賛美に加わる。

16. ほめたたえよ (Benedictus ベネディクトゥス)

これは主イエスのエルサレム入城のときの群衆の歓呼 (マタイ 21:9) に基づくが、さらに古く旧約聖書・詩編 118:26 にさかのぼる。この聖餐式のうちにいよいよ救い主イエス・キリストがおいでになるのを喜び迎える賛歌。

17. 聖霊を求める祈り (エピクレシス=祈求)

感謝聖別のもっとも大切な要素のひとつ。神の力、また力ある命の神ご自身の現れである聖霊によって初めて、パンはパン以上のものとなり、ぶどう酒はぶどう酒以上のものとなる。

第二感謝聖別文のほうに、聖霊を求める趣旨がよりはっきり言葉として出ている。

18. 主イエスの聖餐制定の言葉（アナムネーシス＝想起）

もっとも大切なもうひとつの要素。最後の晩餐は、イエスが弟子たちのために用意された最初の聖餐。これを後々まで繰り返し続けるようにイエスは言われた。聖餐式をわたしたちが行う直接的な根拠はここにある。最後の晩餐におけるイエスの言葉を、司祭の祈りを通して記念・想起し、再現する。ここにイエスの言葉のとおり「これはわたしのからだ」となり、「これはわたしの血」となる。

ここですでにわたしたちは食卓（聖卓）を主イエスと共に囲んでいる。

19. 主の祈り

主の祈りはイエスご自身が祈っておられる祈り。その祈りの中にわたしたちも加わる。

20. 近づきの祈り

この祈り自体はとても深い、貴い祈り。ただし、聖餐式の流れとしては、すでにわたしたちは正客として招かれて主イエスと共に食卓を囲んでいる。そのため、ここであまりに謙遜な祈りをするのは、かえって流れを損ない、また主イエスに対して「水くさい」ことになる可能性がある。降臨節、大齋節などに用いるのが適当と思われる。

2 1. 神の小羊 (Agnus Dei アニユス・デイ)

洗礼者ヨハネがイエスを見て思わず口にした言葉 (ヨハネ 1:29、36)。

この方は、わたしたちの救いのために神に献げられる小羊。神の小羊は十字架にかけられて苦しみを受ける。屠られて血を流すことによって、罪なき神の小羊は、わたしたちの弱さと罪をご自分の身に引き受け、わたしたちの破れと傷を癒してくださる。

奈良基督教会の洗礼盤には、神の小羊が刻まれている。

2 2. 陪餐 (聖体拝領)

わたしたちを愛しておしてくださる救い主イエスは、今、パンとぶどう酒の中に生きて臨在し、ご自身をわたしたちに与えてくださる。畏れつつも、喜びと感謝をもってしっかり受けたい。イエスのいのちは私の中に入り、わたしのいのちとなる。イエスが私の中に生きてくださる。

「アーメン」と言って受け取る。

陪餐後は、イエス・キリストの愛の命が自分の身体の中に深く浸透していくのを味わう。

感謝の祈りまで、静かに祈って待つ。長くなって落ち着かない場合は、退堂聖歌を開いて心の準備をするのもよい。

2 3. 感謝

丁寧にゆっくり唱えることによって、聖餐を受けたことの意味が自分の中に浸透する。

2 4. 祝福・派遣

三位一体の神から祝福を一杯に受けて、主イエスと共にここから出かける。天には栄光が輝き、地には平和が実現するように。

神の国の前進と実現のためにイエスはわたしたちをこの世に送り出すと共に、わたしたちの先頭に立って歩まれる。

司祭の祝福をとおして主イエスの祝福を心と身体に受けた後、しっかり立ち上がる。主に従い、使命を託されてここから世界に出かける。派遣の唱和をとおして司式者と会衆は神の祝福のもとに励まし合う。

消灯が礼拝の終わりのしるし。

- 聖餐式において大切なのは、まずしっかり受けること（赦しを、主のいのちを、祝福を）、そして自ら思いと言葉と姿勢で参加すること。祈祷書を見ることを少なくし、応答のところは顔を上げて、今、ここに立ってわたしたちに呼びかけておられる主イエス・キリストに触れることを大切にしたい。
- 礼拝、ことに聖餐式は司式者と会衆、役割分担者が協力しあって進めていくことで、聖なるドラマを一緒に体験する。参加することによってお互いに力を受ける。
- 静けさと集中。祈りと歌の声は、神を愛し信頼する思いでしっかりと主体的に出す（心の中から発して外に＝神に向かう）。

(2007/10/07 2013/06/23)